

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊28年日
創刊1989年 Nr.325

GEKKAN-WIEN 2016年7&8月号



La gallina ciega (Das Blindenkuhspiel) Francisco de Goya (1746 - 1828) 1788
Leinwand, 269 x 350 cm © Photographic Archive, Museo Nacional del Prado, Madrid
ウィーン美術史博物館 Feste Feiern. 125 Jahre - Jubiläumsausstellung 展示中



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 58



我が国の産学官の協力により、二〇一三年十二月からベトナム原子力界のリーダーを担う人材、及び自立した研究者・技術者の育成を目的とした日本ベトナム原子力研究・人材育成フォーラムを開催している。五月九〜二〇日に第六回フォーラムがダラットで開催された。過去五回のテーマは、それぞれ熱流動、材料、研究炉、人材育成、非破壊検査だったが、今回は計測・制御に関する最新の技術と研究の動向について情報や意見交換を行うことにより、両国のコミュニケーション

及び日本の学生六名によるグループ討論が実施された。事前に事務局より送付された資料を基に、「エネルギー、環境、及び経済性と整合するため、今後ベトナムと日本はどのような対策を取り、どの分野で協力すべきか」について、三グループ毎に二日目朝から準備し、午後の結果を発表してフロアで討議した。筆者はこの発表の際にベトナム原子力研究所のザン氏と共同議長を務めた。学生達はインターネットで良く調べ、発表する際の受け答えも堂々たるものであった。一泊二機中泊と弾丸出張であったが、ベトナム政府や学生の積極的な参加があり、先方の意欲を感じさせるフォーラムだったと思う。

が国からは、大使館、福岡県、日立、東芝、三菱国際原子力開発、原子力安全システム研究所、原子力機構、東工大、長岡技術大、東宮都市大、東京大から計三十五名、ベトナムからは教育訓練省、放射線・原子力安全規制庁、原子力研究所、電力公社、放射線技術開発センター、原子力技術工業応用センター、ダラット大学、電力大学、ダナン工科大学などから約七十名の参加があった。

フォーラムでは計二十七件の発表があり、両国の原子力発電状況、日本のメーカーから最新の技術などが紹介された。また、今回初めてベトナムの学生・若手研究者十二名



19th-20th May 2016 Meeting room of the Nuclear Research Institute

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の役所について述べてみたい。ウィーン市庁舎は、フリードリヒ・フォン・シュミットの設計により一八八三年に建設された。教会建築以外では、ウィーンで最も重要なネオゴシック建築である。中央尖塔の高さは九七・七m、その上にはウィーンのシンボルの一つである三四mの鉄のライトハウスマンが立ち、六mの旗を持っている。市庁舎内外は多種多様なイベント会場として使われる。最も重要なイベントは、毎年五月に開催されるライフバル(舞踏会)である。七月〜九月には市庁舎前広場の音楽映画フェスティバル。十月からはクリスマス市が開催される。一月〜三月まで設置されるアイスドリームは、世界で最も美しいアイススケートリンクとされている。

一方、京都市役所は、市営織課の

設計、京大建築科卒の中野進二の意匠、京大本館・時計台の設計者である武田五二京大教授の補整を経て、九十七年に竣工した。政令指定都市の市役所では最も古い。車寄せを有する玄関を正面中央に据え、ほぼ完全に左右対称で、中央と両翼を突き出させて強調し、さらに塔を持つなど、欧州ネオ・バロックの骨格の伝統様式が特色である。また、細部では日本、中国イスタム、インドなど多彩な東洋の建築様式を採用している。こちらも、四月の京都さくらまつきい、五月の京の伝統と食のイベント、十月の京都国際映画祭、月回のフリーマーケットなど多種多様なイベント会場となっているのが似ている。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、市庁舎での音楽映画フェスティバル、クリスマス市を訪れ、スケートもする機会があった。京都市役所は、さくらまつきいの日を覗いたり、最近では中に入る機会もあつた。両市の役所を紹介できた幸運に感謝しつつ、音楽映画フェスティバル開催時の市庁舎のスケッチを掲載させていたたく。

■ 杉本純 東大特任教授 前京大教授 元原子力機構ウィーン事務所長 ■



2016, Aug 7, 2016